

高等学 校

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

公 民

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	3
V	研究内容	5
VI	研究の成果	22
VII	今後の課題	24

研究主題	現実社会の諸課題について、課題把握・課題追究・課題解決の学習過程を通して、公正に判断する力・論拠を基に議論する力を育むための授業改善
-------------	---

I 研究主題設定の理由

本部会では、平成 28 年 12 月の文部科学省中央教育審議会答申で指摘されている新しい時代に求められる力を育成するための授業改善について検討した。

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（文部科学省中央教育審議会平成 28 年 12 月）（以下『答申』と表記）では複雑で変化の激しい社会の中で、「様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力の育成が社会的」に要請されている。この力を育成するために解消すべき課題として「判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べること」、「自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識を持っているかどうか」という点では、肯定的な回答が国際的に見て相対的に低いこと」などが指摘されている（『答申』）。

『答申』別添 3-1 を基に考察すると、公民科においては、生徒が学習課題について把握し、探究し、その解決に向けて見通しをもち、「社会的な見方・考え方」を働かせながら、考察・構想し、議論等をする学習活動を行うことが重要となる。この理念を具体化するには、社会的な事象や現実社会の諸課題について、公民科の特質に根ざした視点と問いを設定し、知識・技能を活用しながら多面的・多角的に考察し、その課題解決に向けて構想し、最終的に合意形成や社会参画を視野に入れながら、構想したことを、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論する学習過程を構築する必要がある。

平成 28 年度の本部会においては、社会的な事象について、多面的・多角的に考察し、その内容を表現する力を育むための指導と評価の一体化について研究した。研究成果として、身に付けた知識・技能を活用する場として、個人ワーク、グループワークなどの主体的・対話的で深い学びの場を授業に取り入れることが効果的であることを確認し、主体的・対話的で深い学びの効果的な学習活動の在り方が課題として提示された。

そこで、本部会では学習過程を今年度に引き継ぐ大きなテーマとし、単元指導計画に着目して適切な学習過程を設定することで、思考力・判断力・表現力等を高めることができると考え、「現実社会の諸課題について、課題把握・課題追究・課題解決の学習過程を通して、公正に判断する力・論拠を基に議論する力を育むための授業改善」という研究主題を設定し、その内容や方法について授業実践に有用な学習指導案として提案することにした。特に、単元指導計画において課題把握・課題追究・課題解決という一連の学習過程を重視することで、一単位時間の展開のみの授業改善ではなく、単元全体で見た指導の在り方について考察を深めた研究ができると考えた。そこで、単元を通じて身に付けさせたい力を生徒に習得させるために、単元を貫く基軸となる問いや公正に判断できる力を養う個人ワーク・グループワークの場面設定を工夫するとともに、単元のまとめとして、合意形成に向けた対話を進めることに留意して学習過程を組み立てた。

Ⅱ 研究の視点

『答申』では、新しい時代に求められる資質・能力を、以下の三つの柱に整理している。

- ・生きて働く「知識・技能」の習得
- ・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

今年度の高等学校各部会の共通テーマは、この三つの柱の中の「思考力・判断力・表現力等」の育成に重点を置き、「新しい時代に求められる『思考力・判断力・表現力等』を高めるための授業改善」としている。

『答申』によると、知識・技能は、思考・判断・表現を通して習得されたり、その過程で活用されたりするものであり、また、社会との関わりや人生の見通しの基盤ともなる新しい時代に求められる資質・能力の三つの柱は、相互に関係し合いながら育成されるものとしている。

本部会としても、「思考力・判断力・表現力等」を高めることは、相乗的に「知識・技能」と「学びに向かう力・人間性」とを高めることにつながると考えた。そこで、本部会では、高等学校公民科における「新しい時代に求められる『思考力・判断力・表現力等』」とは何かについて、『答申』別添3-2に依拠して以下の定義を確認した。

- ・諸課題について、事実を基に概念等を活用して多面的・多角的に考察したり、公正に判断したりする力
- ・合意形成や社会参画を視野に入れながら、社会的事象や課題について構想したことを、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論する力

高等学校公民部会の主題を設定するに当たり、『答申』の指摘を踏まえつつ、日々の授業を通じて認識している現状について、以下の1及び2に整理した。

- 1 知識理解の伝達を中心とした授業をすることが多く、知識・技能を活用する場を授業内で設定できておらず、多面的・多角的に考察することが十分ではない。
- 2 社会的事象や現実社会の諸課題について、既習の概念や理論を関連付けて、課題解決のために他者と協働し構想することが十分ではない。

この現状を改善していくためには、現実社会の諸課題について、多面的・多角的に考察し公正に判断する力と、学習した概念や理論を関連付けて構想し、論拠を基に議論する力を育成する学習過程を設定する必要があると考えた。現実社会の諸課題を解決するのに必要なことは、基礎的・基本的な事項を理解するだけでなく、それらを活用して思考を深めていく力と、多様な意見を踏まえて合意形成に向けて判断し、表現する力を育成することであると考えた。

本部会では、現実社会の諸課題について、多面的・多角的に考察し、課題追究に必要な公正に判断する力、課題解決の場面を通して論拠を基に議論する力を育成することを目指す授業実践について研究を進めた。具体的には、課題を把握するために、現実社会の諸課題について、基軸となる問いを設定し、個人ワークとグループワークで既習の知識・技能を活用し、多面的・多角的な視点をもって、課題追究し、他者との合意形成に向けた話し合いを行う課題解決の学習過程を通して、公正に判断する力、論拠を基に議論する力を育成する授業の実践事例を提示することにした。

Ⅲ 研究仮説

本研究では、以下の仮説を立て、検証授業を通して、その有効性について分析することにした。

- 1 現実社会の諸課題について、課題把握・課題追究するための学習活動を行うことができれば、知識・技能を活用し、それを基に多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むための授業改善をすることができる。

現実社会の諸課題について、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育成することは、これからの複雑で変化の激しい社会の中で、社会的な見方・考え方を働かせて、主体的に生きる力につながっていくと考えられる。各部員の通常授業の課題を KJ法で整理、確認していく中で、「知識・技能を活用する場面」の設定が十分になされていないため、「多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」を育む活動が不十分になることについて共通認識をもつことができた。

そこで、現実社会の諸課題について、既習の知識・技能を活用して「課題把握」を行う学習活動と、把握した現実社会の諸課題について多面的・多角的に考察し、「公正に判断する力」を育む「課題追究」の学習活動を設定すれば、公民科における「新しい時代に求められる『思考力・表現力・判断力等』」を育むための授業改善になると考えて仮説を設定した。

- 2 現実社会の諸課題を、課題解決するための学習活動について、概念や理論を関連付けて構想することができれば、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論する力を育むための授業改善をすることができる。

学習の過程に「社会的な見方・考え方を働かせて、課題解決のために学習した概念や理論を関連付けて構想する場面」の設定が十分になされていないため、合意形成・社会参画を視野に入れながら、「論拠を基に議論する力」を育むことが不十分となると考察した。そこで、知識・技能及び、社会的な見方・考え方を活用する場面を学習過程に設定することで「論拠を基に議論する力」を育成できると考えた。

また、「論拠を基に議論する力」は、多様な意見を踏まえて合意形成に向かう力へつながり、他者と議論を進める中で、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、現実社会の諸課題を解決していくために必要な力であると考えられる。この「論拠を基に議論する力」を育むために、学習過程の中に現実社会の諸課題に関して単元を貫く問いを設定し、社会的な見方・考え方を働かせて「課題解決」していく学習活動の場面を設定することを考えた。

Ⅳ 研究方法

本部会では、学習過程を単元の中に位置付けた今年度の主題に沿って、公民科及び東京都独自設定教科『人間と社会』の検証授業を次のような方法で進めることとした。

各科目において単元における「課題把握」・「課題追究」・「課題解決」の学習過程を明確にする。まず、生徒に基軸になる問いを投げかけ、課題把握した上での知識・技能の習得を目指す。次に、課題追究において多面的・多角的な考察や公正に判断する力を養う。さらに、課題解決に向けた合意形成の過程を重視し、論拠を基に議論する力を育むための授業方法の研究を進める。

1 公民科の各科目及び東京都独自設定教科『人間と社会』の検証授業について

- (1) 『政治・経済』：実践事例Ⅰ…「現代経済の仕組みと特質」について、公的年金制度と確定拠出年金制度についての授業では個人ワーク・グループワークを通じて考察を深め、公正に判断させる力を身に付けさせる授業展開とした。
- (2) 『人間と社会』：実践事例Ⅱ…「選択・行動に関する能力を育成する学習」について、ワーク・ライフ・バランスについて理解した上で、その実現に向けて個人ワーク・グループワークを行う。「自他の尊重」の道徳的価値を自覚し、公正に判断できる力を身に付けさせる授業展開とした。仮説に示した「現実社会の諸課題」の一つに雇用と労働を巡る問題がある。この問題についてはワーク・ライフ・バランスの視点で対応が図られている。
※『人間と社会』を公民科として取り上げた理由
そこで本研究では『人間と社会』第9章「人生とワーク・ライフ・バランス」を、「高等学校学習指導要領公民編」政治・経済(3)現代社会の諸課題ア現代日本の政治や経済の諸課題とも関連性があると考え取り上げた。
- (3) 『政治・経済』：実践事例Ⅲ…「企業の利潤追求の在り方」についての授業では、単元のまとめとして、これまで学習してきた知識・技能を活用してグループ学習において論拠を基に議論させる授業展開とした。
- (4) 『現代社会』：実践事例Ⅳ…「国際社会の動向と日本の果たすべき役割」について、難民問題について考察を深める活動を行う。単元のまとめとしてこれまで学習してきたことを基にして授業内でグループに分かれてディベートを行い、互いに正反対の主張を展開していく中で国際社会に日本がどう貢献していくか、議論を通じて合意形成させる授業展開とした。

2 具体的方策

- (1) 課題を把握するために、現実社会の諸課題について、基軸となる問いを設定する。
- (2) 課題を追究するために、知識・技能を活用するワークシートなどを用いて、個人ワークで自己の意見をまとめグループワークで他者の意見と比較して、多面的・多角的に考察し公正に判断する学習活動を展開する。
- (3) 課題解決するために、単元の振り返りで、考察したことや構想したことをワークシートにまとめさせ、論拠を基に議論する力を育むなどの学習活動を展開する。

3 検証方法

単元の初めと終わりで「思考力・判断力・表現力等」に関するワークシートに取り組みさせることで、単元を学習する前の学力状況を教員が把握し、単元の学習を経てどのように学力状況が変容したかを確認していく。

検証授業で、具体的方策の「公正に判断する力が身に付いているか」について、実践事例Ⅰ・Ⅱを通して、「論拠を基に議論する力が身に付いているか」については実践事例Ⅲ・Ⅳを通じて検証を行うことにした。検証方法としては課題追究で公正に判断する力を育むことができたか、課題解決の場で論拠を基に議論する力を育むことができたかについて、それぞれルーブリックを設定し、生徒の達成状況を確認することで授業の改善点を見いだすことにした。

v 研究内容

全体テーマ 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ

「新しい時代に求められる『思考力・判断力・表現力等』を高めるための授業改善」

各教科等における「新しい時代に求められる『思考力・判断力・表現力等』」とは

- ・諸課題について、事実を基に概念等を活用して多面的・多角的に考察したり、公正に判断したりする力
- ・合意形成や社会参画を視野に入れながら、社会的事象や課題について構想したことを、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論する力

高校部会テーマにおける現状と課題

- 【現状】①知識理解の伝達を中心とした授業であり、知識・技能を活用する場が設定されていないため、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むことができていない。
②社会的事象や現実社会の諸課題について、社会的な見方・考え方を働かせて、課題解決のために学習した概念や理論を関連付けて構想する場が設定されていないため合意形成・社会参画を視野に入れながら、論拠を基に議論する力を育むことができていない。
- 【課題】①社会的事象や現実社会の諸課題について、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むために、課題把握・課題追究を重視した授業改善を行う必要がある。
②社会的事象や現実社会の諸課題について、社会的な見方・考え方を働かせて、課題解決に向けて、学習した概念や理論を関連付けて構想し、論拠を基に議論する授業改善を行う必要がある。

【テーマ設定のための着眼点】

公正に判断する力・論拠を基に議論する力を育むための学習過程に着眼し、テーマを設定した。

高等学校公民部会主題

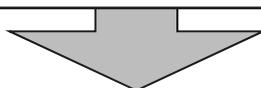
現実社会の諸課題について、課題把握・課題追究・課題解決の学習過程を通して、公正に判断する力・論拠を基に議論する力を育むための授業改善

仮 説

- ①現実社会の諸課題について、課題把握・課題追究するための学習活動を行うことができれば、知識・技能を活用し、それを基に多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むための授業改善をすることができる。
- ②現実社会の諸課題を、課題解決するための学習活動について、概念や理論を関連付けて構想することができれば、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論する力を育むための授業改善をすることができる。

具体的方策

- ①課題を把握し追究するために、現実社会の諸課題について、基軸となる問いを設定し、知識・技能を活用するワークシートなどを用いて、個人ワークで自己の意見をまとめグループワークで他者の意見と比較して、多面的・多角的に考察し、公正に判断する学習活動を展開する。
- ②課題解決するために、単元の振り返りで、考察したことや構想したことをワークシートにまとめさせ、論拠を基に議論する力を育むなどの学習活動を展開する。



検証方法

単元指導計画において、課題追究で公正に判断する力を育むことができたか、課題解決の場で論拠を基に議論する力を育むことができたか、それぞれルーブリックを設定し確認する。

2 実践事例Ⅰ 政治・経済

教科名	公民科	科目名	政治・経済	学年	第3学年
-----	-----	-----	-------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 第1章 現代経済の仕組みと特質
⑦財政のしくみとはたらき ⑰社会保障制度の充実
- イ 使用教材 『高等学校新政治・経済』（第一学習社）
表計算ソフト

(2) 単元（題材）の目標

- ・日本の財政状況と社会保障制度における公的年金制度のしくみと課題について理解する。
- ・現代の日本企業において、企業年金（退職年金）として導入されている確定拠出年金制度の仕組みと課題について把握し、解決に向け追究する。
- ・データについて、表計算ソフトを使用し分析することができる。
- ・知識と技能を活用し、公正に判断する力と論拠を基に議論する力を育み、主体的に根拠のある拠出金運用に取り組むことができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①日本の財政状況と社会保障制度の課題を理解するとともに、企業年金制度が変容していることについて把握している。	①課題について、知識・技能を活用しそれを基に多面的・多角的に考察し、公正に判断することができる。	現実社会の諸課題を把握・追究し、その解決に向けて、他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に議論することで、他者と合意形成し、社会に参画しようとしている。
②必要な情報を収集し効果的にまとめ、表計算ソフトを活用し、拠出金の運用をシミュレーションすることができる。	②課題について、概念や理論を関連付けて構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論することができる。	

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
	【基軸となる問い】自分の将来の生活資金を誰に任せますか。				

第1時 (課題把握)	【ねらい】日本における財政の役割とその課題について把握する。				
	【小さな問い】私たちが納める税金は、どんなことに使われているのか。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出項目において、社会保障関係費の割合が最も高いことを教科書の資料から読み取る。 ・歳入項目における公債金の割合、及び公債残高を教科書の資料から読み取る。 ・財政の役割について理解するとともに、社会保障関係費の増加や公債の利払いが、大きな財政負担となっていることを把握する。 	●			<ul style="list-style-type: none"> ・日本における財政の役割及びその課題について理解している(ワークシートを提出させ評価)。
第2時 (課題追究)	【ねらい】企業年金が確定拠出型へ移行していることから、運用が自己責任であることを学び、その運用方法としてのシミュレーション技能を身に付ける。				
	【小さな問い】老後の資金となる公的年金と退職金とは何か。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で学習した社会保障関係費の一部は年金給付に充てられていることを学習し、公的年金制度の課題を把握する。 ・企業の退職金(企業年金)制度が確定拠出型へ移行している企業が増加傾向にあることを把握する。 ・確定拠出年金の運用方法として、分散投資理論を学び表計算ソフトを用いて再現する。 	●	●		<ul style="list-style-type: none"> ・公的年金制度、及び確定拠出年金制度の仕組みと課題について理解している(ワークシートを提出させ評価)。 ・分散投資理論を用いて拠出割合をシミュレーションすることができる(表計算によるファイルを提出させ評価)。
第3時 (課題追究) 本時	【ねらい】各種運用商品について、多面的・多角的に考察し、拠出金運用について公正に判断する。				
	【小さな問い】妥当性のある拠出金割合とは何か。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアワークにて、各運用商品の数値的特徴(平均値・標準偏差)、カントリーリスク、外国為替リスクを考慮に入れ、運用商品選択を行う。 ・前時で学習した分散投資理論にてシミュレーションし、適切な拠出金割合の算出に取り組む。 	●	●		<ul style="list-style-type: none"> ・確定拠出年金運用商品について、多面的・多角的に考察し、拠出金先や割合について公正に判断することができる(ワークシート・プリントを提出させ評価)。 ・ルーブリックAを使用
第4時 (課題解決)	【ねらい】前時までに各自がまとめた資料(論拠)を基に議論し、より良い課題解決を導く。				
	【小さな問い】自分自身のライフプランに合わせた運用方法とは何か。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までに作成したワークシートやファイルを論拠に、生徒自身のライフプランやファウンダメンタルズの要因も考慮に入れ、グループワークを行い、他者と協働し発表をする。 ・振り返りシートで単元のまとめを行う。 		●	●	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までに作成した資料やシミュレーション結果を論拠として議論し、他者と意見を交わすことで考察を深め、社会に参画しようとする態度が育っている(振り返りシートを提出させ評価)。 ・ルーブリックBを使用

(5) 本時（全 4 時間中の 3 時間目）

ア 本時の目標

(ア) 為替リスクやカントリーリスクについて考察し確定拠出年金の運用先を選定する。

(イ) 既習の分散投資理論を用いて、拠出金の適切な割合を協働しながら導き出す。

イ 仮説に基づく本時のねらい

現実社会の課題である確定拠出年金の資産配分について、既習の知識・技能を活用し、多面的・多角的考察を踏まえ、公正に判断することができる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	・ICT機器を使用し、主題とループリックを提示し、学習の動機付けを図る。	・ICTを使用し、本時の授業のテーマ『妥当性のある拠出金割合とは』を提示し、本時の授業の目標を示す。	
展開 35分	<p>【小さな問い】妥当性のある拠出金割合とは何か。</p> <p>【ペアワーク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先進国の通貨と新興国の通貨について柱状グラフを作成し、既習の外国為替の知識を活用し、リスクを考察する。 ・日本・先進国・新興国のカントリーリスクをまとめる。カントリーリスクとして、各国の財政状況を資料から読み取る。 ・各リスクを踏まえた上で拠出金運用先を選出する（2～3種類）。 ・前時で学習した分散投資理論を活用し、適切な割合をシミュレーションする。 ・ペア毎の発表を行い、他者の意見を参考に、よりよい確定拠出年金の運用先および割合を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導を行い、PCでのグラフ作成を支援をする。 ・机間指導を行い、ペアワークの協議内容を確認する。 ・机間指導を行い、多面的・多角的に協議し、シミュレーションできているペアを選出し、発表の指示をする。 	<p>ア-② （机間指導による観察、課題ファイルの作成、提出）</p> <p>イ-② （机間指導による観察、ワークシートの記入、提出） 《ループリックA》</p>
まとめ 10分	・老後の大切な資金となる退職年金の運用方法について、本時のまとめを行い、課題ファイル・ワークシートを提出する。	・授業内容を想起させて、ワークシートを記入させる。	

(6) 問いの設定理由

本単元では現実社会の課題として、近年増加傾向にある企業型確定拠出年金制度を題材とした。老後の生活資金と関係していることから、公民科の授業に金融教育の視点を取り入れる必要がある。生徒が近い将来直面する現実社会の課題に対し、多面的・多角的に考察し公正に判断することや、論拠を基に議論することができるように基軸となる問いと各時の問いを設定した。

(7) 本時の振り返り

ア ルーブリックによる評価結果

表1【「ルーブリックA」多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	A (十分満足できる) 59.4% (22/37人)	B (おおむね満足できる) 27% (10/37人)	C (努力を要する) 13.6% (5/37人)
確定拠出年金について、他者と協働しながら、多面的・多角的に考察し、分散投資理論を用いて公正に判断した資産配分ができる。	他者と協働し、各商品のリスク整理を行い、運用商品の選択を行った上で、分散投資理論にて適切な拠出割合を示すことができる。	他者と協働し、各商品のリスク整理を行い、運用商品の選択を行うことができる。	他者と積極的に意見交換をせず、各商品のリスク整理をしないまま、運用商品の選択を行っている。

イ アンケート結果

検証授業に参加した生徒37人のアンケートから、「自分の将来の年金について考えることができた。」と肯定的な意見が多数を占め、生徒自身が主体性をもって将来の年金運用について考察できるようになったと考えられる。

ウ 仮説の検証

本時では、研究構想図における仮説①について、現実社会の課題として企業型確定拠出年金制度を題材に、既習の知識や教科を横断する技能を活用し、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むことができたかを検証した。他者と協働し、各金融商品のリスク整理した上で、運用商品を選択することを「多面的・多角的考察」、シミュレーションによる分析結果を踏まえ、客観的に判断することを「公正に判断する力」と定義した。この指標で、A (十分に満足できる) と評価した生徒が、59.4%該当したので、仮説①には一定の効果が認められる。

エ 成果と課題

(ア) 成果

現実社会の課題について、単元で学習した知識や、技能を活用するためのペアワークの場を設定し、全ての生徒が他者と協働し考察している姿を確認することができた。また既習内容とICT機器を活用し、各運用商品のリスク整理を行った上で、選択に至っている生徒も確認することができた。また、紙面で計算するのに時間のかかる数式を、PC操作で何通りものシミュレーションができる点は、ICT機器の有用性として挙げるができる。

(イ) 課題

個人で資産運用をする必要性が増し、それに伴い金融教育の必要性が高まってきたと感じている。しかし、今回の検証授業では多面的・多角的考察に当たる各金融商品のリスク整理について、十分な考察ができておらず、C (努力を要する) と評価した生徒が13.6%該当したことから、金融商品を教材として扱うには工夫が必要となる。また、ICT機器について、生徒個人の操作技能に差がみられたため、授業の進行管理が難航した点が課題である。

3 実践事例Ⅱ 人間と社会

教科名	人間と社会	科目名	人間と社会	学年	第1学年
-----	-------	-----	-------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 第9章 人生とワーク・ライフ・バランス

イ 使用教材 人間としての在り方生き方に関する教科『人間と社会』東京都教育委員会

(2) 単元（題材）の目標

ワーク・ライフ・バランスについて理解し、自分自身、そして共に生きる人たちが求める生き方を互いに理解し合い、尊重する態度を育成する。

(3) 単元の評価規準

- ・ ワーク・ライフ・バランスの意味と現実社会における現状を理解する。
- ・ ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて、現代社会の諸課題を把握し、課題解決に向けて多面的・多角的に考察し、公正に判断することができる。
- ・ ワーク・ライフ・バランスの実現に向け、共に生きる人々の多様性を理解し、自他の尊重の重要性について、論拠を基に議論することができる。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（2時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
【基軸となる問い】自分にとっての理想のワーク・ライフ・バランスとは何だろうか。					
第1時 (課題把握・追究) (本時)	【ねらい】ワーク・ライフ・バランスを実現することの意味を理解し、ワーク・ライフ・バランスに対する自分の考えを整理し、他者の考えを聞くことで改めて自己の考えを考察する。				
	【小さな問い】ワーク・ライフ・バランス実現への課題は何か。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の理想を前提として考えた、ワーク・ライフ・バランス実現のための課題について、ワークシートに記入 ・グループワークを行い、自分の考えを伝え、他者の考えを聞く。 ・グループワークを踏まえ、自分の考えについて考察したことワークシートにまとめる。 		●		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を整理し、他者の意見を聞くことができる（机間指導による観察、ワークシートの記入・提出）。 ・グループワークを通して、自分の考えの変容をまとめる（ワークシートの記入・提出）。
第2時 (課題解決)	【ねらい】ケーススタディの事例から、共に生きる人（々）と考えが異なるとき、どのように考えを共有し、何が最善かを考える力を養う。				
	【小さな問い】共に生きる人々と考え方が異なったらどうするか。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の活動を踏まえ、ケーススタディを読み、自分の考えをワークシートにまとめる。 ・グループワークを通して、他者の考えを聞き、他者の考えを踏まえた自分の考えをまとめる。 ・自分の理想のワーク・ライフ・バランスについてまとめる。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを記入している（ワークシートの記入・提出）。 ・他者の意見から何を考え、どのように意見が変わったか理由を基に自分の考えを記入している（ワークシートの記入・提出）。

(5) 本時（全2時間中の1時間目）

ア 本時の目標

(ア) ワーク・ライフ・バランスの意味を理解し、資料から現実社会におけるワーク・ライフ・バランスの実現の難しさについて自己の考えを整理することができる。

(イ) ワーク・ライフ・バランス実現に向けた課題解決に向けて他者と協働して多面的・多角的に考察、構想し、公正に判断することができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 現実社会の諸課題について資料を活用して考えさせることで、知識・技能を活用する場を設ける。

(イ) 個人ワークにより資料を活用して自己の意見をまとめ、グループワークにより他者の意見と自己の意見を比較することで、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を養う。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を使用し、主題とループリックを提示し、学習の動機付けを図る。 ワーク・ライフ・バランスの言葉の意味を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器とワークシートで提示した資料から、本時の授業のテーマ『理想のワーク・ライフ・バランス』を提示し、本時の授業の目標を示す。 	
	<p>【小さな問い】ワーク・ライフ・バランスのイメージを作ろう。</p>		
	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの個人ワークについて自分の考えをワークシートに記入する。 資料を読み、ワークシートに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分一人で取り組むよう指示を徹底する。 	
展開① 10分	<ul style="list-style-type: none"> 「長時間労働」、「有給休暇の取得率の低さ」、「産後女性の職場復帰の少なさ」についての資料を読み、ワークシートに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料の読み込みに際し、自分一人で作業をするように指示を徹底する。 資料について簡単に補足説明をしながら、机間指導を行い、生徒の進捗を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 現実社会の諸課題を読み取り、諸課題の解決に向けた考察を行っている（ワークシートの記入・提出）。
展開② 15分	<ul style="list-style-type: none"> 個人ワークを踏まえ、グループワークで自分の考えを伝える。 他の生徒の意見についてメモを取る。 意見を伝え終わったグループは、他の生徒の意見について思ったことを伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 3名程度を目安とし、話しやすい雰囲気を作る。 机間指導を行い、生徒の状況を確認する。 人によって価値観・考え方が多様であることを気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 他者の意見に正対し、価値観の多様性を踏まえながら議論することができる（机間指導による観察、ワークシートの記入・提出）。
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> グループワークを踏まえて、ワーク・ライフ・バランスの実現について考え、ワークシートに記述し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 何を根拠として意見が変わったか、又は変わらなかったかを、グループワークを踏まえて書くよう指示をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ワーク・ライフ・バランスの意味を理解し、理由や根拠を明確にした上で、自分の考えを振り返ることができる（ワークシートの記入・提出、ループリックの活用）。

(6) 問いの設定理由

本単元はワーク・ライフ・バランスについて考える単元となっている。現代社会の諸課題として、長時間労働、残業代未払い、パワーハラスメント、男女の労働条件の格差など、社会に出た後も直面する可能性のある社会的問題は多い。そのような課題と向き合い、どの

ように対処していくべきか考えることのきっかけとして問いを設定した。事実として存在する労働実態を踏まえつつ、様々な労働観をもつ人々がいることにグループワークを通じて気付かせ、それらを踏まえて一人一人が現実社会の諸課題と向き合い、課題追究に向け多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を養うことを目的とする。

(7) 本時の振り返り

ア ルーブリックによる評価結果

表2【「ルーブリックA」多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	A (十分満足できる) 35.7%(5/14人)	B (おおむね満足できる) 28.6%(4/14人)	C (努力を要する) 35.7%(5/14人)
資料を見ながら、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた取組について考え、ワークシートに記入している。	資料を理解し、グループワークに参加した上で、現代社会においてワーク・ライフ・バランスの実現のために必要なことを資料や他者の意見を根拠として考察しワークシートに記入している。	資料の理解は不十分だがグループワークに参加し、現代社会においてワーク・ライフ・バランスの実現のために必要なことを、他者の意見を踏まえて考察し、ワークシートに記入している。	資料や他者の意見を根拠にせず、ワーク・ライフ・バランスを実現させるために必要なことを考え、ワークシートに記入している。

イ アンケート結果

検証授業に参加した14名を対象にアンケートを実施した。検証授業前のアンケートから、「将来つきたい仕事がある。」と答える生徒は全体の60.0%であった。また高校卒業後には「働くイメージがある。」生徒は66.7%、「人生設計のイメージがある。」は26.7%であった。

検証授業後に行ったアンケートでは、「ワーク・ライフ・バランスを充実させたい。」と答える生徒は88.9%、「長時間労働は問題である。」と答え、ワークライフバランスを充実させるために「有給休暇を積極的に取りたい。」と答える生徒が77.8%と現代社会の諸課題について、より具体的に考えることができるようになっている。このことから、なんとなく考えていただけの生徒が、授業を通じて、より真剣に考えた結果、現実社会の諸課題が、現実問題として自己が向き合っていくべき課題に変わった様子が見受けられた。

ウ 仮説の検証

課題把握・課題追究の学習過程として、課題把握では自分の人生設計をイメージした後に、資料を活用して現代社会の諸課題である「長時間労働」、「有給休暇の取得率の低さ」、「産後女性の職場復帰の少なさ」の3点について、自己の考えを整理する個人ワークを行い、その後各課題について検討するグループワークを通じて、他者の考えや視点を理解するための課題追究の場を設定した。これらの学習を基に、知識・技能を活用し、それを基に多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むことができたかを検証した。

なお、本検証授業では、「公正に判断する力」を、ワーク・ライフ・バランスについて、自己本位にせず、他者と共に現実社会の諸課題とどのように向き合っていくか、他者の意

見を踏まえ、資料を読み取り、多面的・多角的に考察し、客観的に判断する力と定義した。ルーブリックから、おおむね満足できる B 以上の評価である生徒が 64.3%と「公正に判断する力」を育む授業改善として仮説①は一定の成果を上げることができたと判断できる。

エ 成果と課題

(ア) 成果

基軸となる問いを設定し、それに向けた課題把握・課題追究の学習の場を明確にしたことにより、取り組むべきことを明確にしながら生徒は学ぶことができた。資料の活用やグループワークへの参加を通し、多面的・多角的に判断をしている様子が見受けられた。

また、課題解決の学習の場面ではケーススタディの文章に対し、78.6%の生徒が自分の考えをもつことができ、グループワークにおいて意見を伝えることができた。また、他者の意見を踏まえて、自分の意見を考察できた生徒が 14.2%であった。

(イ) 課題

資料を読み取れない生徒や、グループワークに参加できない生徒が一定数見受けられるなど、生徒の個人差があった。課題把握・課題追究の場面では、生徒のアルバイト等の経験を活かす等、実体験を伴う思考のプロセスを取り入れられるような基軸となる問いの設定を十分検討し、公民科の教科による既習事項を活用することができる題材の設定が重要だと考えられる。

また、課題解決の学習の場面では、自分の意見を伝えることはできたが、他者の意見を踏まえて自分の意見をまとめることができる生徒は少なかった。このことから、各学習過程において、他者の意見を踏まえ、自分の意見をまとめる学習活動の場面を設定した単元指導計画を作成する必要があると考えられる。

4 実践事例Ⅲ 政治・経済

教科名	公民科	科目名	政治・経済	学年	第3学年
-----	-----	-----	-------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 (2) 現代の経済

ア 現代経済の仕組みと特質

イ 使用教材 『高校政治・経済』（実教出版）

(2) 単元（題材）の目標

- ・企業が家計や他の企業から提供された土地、労働、資本といった生産要素を結合し生産活動を行うことを理解する。
- ・企業の目的について、多面的・多角的に考察し、公正に判断することができる。
- ・企業の役割について、複数の立場や意見を踏まえて社会を形成する主体として構想し、その解決に向けて、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論することができる。
- ・企業の役割について、諸課題を見だし、その解決に向け意欲的に取り組んでいる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 企業が家計や他の企業から提供された土地、労働、資本といった生産要素を結合し生産活動を行うことを理解している。	① 企業の目的について、多面的・多角的に考察し、必要な選択・判断の基準となる概念等を活用して、公正に判断することができる。	① 社会の在り方に関わる事象や課題について主体的に調べ、分かろうとして課題を意欲的に追究している。
② 現代の企業の多くが株式会社の形態をとっていることを理解している。	② 合意形成や社会参画を視野に入れながら、企業の役割について、複雑な課題を把握し、説明するとともに、身に付けた判断基準を根拠に構想したことを妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論することができる。	② よりよい社会の実現のために企業の諸課題を見だし、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に説明・議論することを通して、社会に参画しようとしている。
③ 社会的事象に関する諸課題の解決に必要な情報を効果的に収集、読み取り、まとめることができる。		

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
【基軸となる問い】現代の企業が果たす役割について、利潤追求の視点から考えてみよう。					

第1時 (課題把握)	【ねらい】企業が家計や他の企業から提供された土地、労働、資本といった生産要素を結合し生産活動を行うことを理解する。			
	【小さな問い】企業はどのように生産活動を行うのか。			
	<ul style="list-style-type: none"> 企業に関連する現代社会の課題（企業の談合、長時間労働等）について例示する（基軸となる問いに関連）。 経済主体の復習を行う。 多様な企業形態について、事例を出し、確認する。 	●		<ul style="list-style-type: none"> 多様な企業形態について理解している（ワークシートの記入・提出）。
第2時 (課題把握)	【ねらい】現代の企業の多くが株式会社の形態をとっていることを理解する。			
	【小さな問い】株式会社とは何か。なぜ、多くの企業は株式会社の形態をとっているのか。			
	<ul style="list-style-type: none"> 現在の企業形態の多くが株式会社なので、その例を数社示し、株式会社の仕組みや目的について、考察したことをワークシートにまとめ、発表する。 	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 株式会社の仕組み、株式会社の目的について理解し、そのメリット・デメリットについて考察している（ワークシートの記入・提出）。
第3時 (課題追究)	【ねらい】企業の目的について多面的・多角的に考察し、企業は誰のものなのか考察する。			
	【小さな問い】企業は誰のものか。			
	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を活用し、株式会社の事業内容や株式情報、CSR情報の資料から、「企業は誰のものか」について、個人ワーク、グループワークを行い考察する。 「企業は誰のものか」について、各グループが発表を行い、自己の意見、グループの意見と比較し、企業の目的について公正に判断する。 	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 個人ワークの中で、企業の目的についてワークシートにまとめている（ワークシートの記入、提出）。 企業の目的について、他者と比較し自分の考えをまとめ、公正に判断することができる（机間指導による観察、ワークシートの記入・提出）。
第4時 (課題解決) 本時	【ねらい】企業は、生産性を高め、法令を遵守しながら利潤を追求するばかりでなく、雇用の促進や技術の開発などを通して、経済社会の進展に寄与するとともに、環境保全や文化の向上などにも貢献する社会的責任を負っていることについて、議論することができる。			
	【小さな問い】現代の企業が社会から求められている役割とは何か。			
	<ul style="list-style-type: none"> 現代の企業が社会から求められている役割について、個人ワークを行う。 グループで企業の役割に関する提案を一つに決定する。この際、その提案が、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、議論を深める。 	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 社会的事象に関する諸課題の解決に必要な情報を効果的に収集、読み取り、まとめることができる（机間指導による観察、ワークシートの記入・提出）。 企業の利潤追求の視点と株主、ステークホルダー、社会的責任などの視点を活用して、現実社会から求められている企業の役割について構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論することができる（机間指導による観察、ワークシートの記入・提出）。

(5) 本時（全4時間中の4時間目）

ア 本時の目標

- 企業は、生産性を高め、法令を遵守しながら利潤を追求するばかりでなく、経済社会の

進展に寄与するとともに、環境保全や文化の向上などにも貢献する社会的責任を負っていることについて理解することができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- ・学習への理解を深め、企業の目的、企業の役割などの現実社会の課題解決について考察し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、議論することができる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習事項を確認する。 ・ループリックで、授業の到達目標を示し、学習の動機付けを図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを使用し、前時の復習をさせる。 ・ICTを使用し、本時の授業のテーマ『現代の企業が社会から求められている役割とは何か』を提示し、本時の授業の目標を示す。 ・今までの学習や新しい資料を基に企業の利潤追求の視点から、現代の企業が社会から求められている役割について考えをまとめることを伝える。 	
展開 35分	<p>【小さな問い】現代の企業が社会から求められている役割とは何か。</p>		
	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の企業が社会から求められている役割について、個人ワークを行う。(ワーク1) ・個人ワーク後、グループになり、与えられた企業の情報を読み取り、この企業が社会から求められている役割を果たすために、取り組むべき企業活動を考え、ワークシートにまとめる(ワーク2)。 ①個人ワークを行う。 ②グループワークを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・個人ワークで考えた提案の情報交換を行う。 ・グループで提案を一つに決定する。その提案が、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、議論を深める。 ③数グループ、発表を行う。時間が可能であれば、全グループの発表を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> (提示する企業の情報) ・事業内容 ・株主に関わる情報 ・ステークホルダーに関わる情報 ・机間指導を行い、生徒の学習状況を確認する。 ・グループメンバーの意見と自分の意見を比較検討させる。 	<p>アー③(机間指導による観察、ワークシートの記入、提出)</p> <p>イー②(机間指導による観察、ワークシートの記入、提出) 《ループリックの活用》</p>
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを行い、現代の企業の目的・役割について学習したことをまとめる。(ワーク3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容を振り返えらせる。 	

(6) 問いの設定理由

本単元は、企業は生産性を高め、法令を遵守しながら利潤を追求するばかりでなく、雇用の促進や技術の開発などを通して経済社会の進展に寄与するとともに、環境保全や文化の向上などにも貢献する社会的責任を負っていることを理解させるものである。したがって、現実社会が求めている企業の役割・目的について、多面的・多角的に考察し、公正に判断すること、論拠を基に議論することができるように問いを設定した。

(7) 本時の振り返り

ア ループリックによる評価結果

表3 【「ループリックB」論拠を基に議論する力を評価するループリック)】

評価規準	評価基準
------	------

	A (十分満足できる) 53.8% (21/39人)	B (おおむね満足できる) 35.8% (14/39人)	C (努力を要する) 10.2% (4/39人)
企業の利潤追求の視点と株主、ステークホルダー、社会的責任などの視点を活用して、現実社会から求められている企業の役割について構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論することができる。	企業の役割について、企業の利潤追求の視点と株主、ステークホルダー、社会的責任などの概念と関連付けて構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論することができる。	企業の役割について、他者の主張を踏まえたり取り入れたりして、企業の役割についての自分の考えを再構成し思考を変容させ、論拠を基に議論することができる。	企業の役割について、他者の主張を参考にしているが、具体的に考察できていない。

イ アンケート結果

検証授業に参加した生徒 39 人にアンケートを実施した。「グループで議論することにより、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりすることで、その企業活動にとって最善は何かを考えることができた。」など肯定的なアンケートが 80% を占めた。このことから、個人ワークの後で、グループワークを行うことで他者との意見交換により、個人の考えが多面的・多角的に考察され、グループ毎に発表することで、企業の利潤追求の視点と株主、ステークホルダー、社会的責任などの視点を活用して、現実社会から求められている企業の役割について構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論を深めることができたものと推察できる。

ウ 仮説の検証

単元の課題把握の場面では、基軸となる問いを設定することで、生徒が学習活動全体をつかみ、課題追究の場面では、「企業は誰のものか」という問いから、企業の目的について、多面的・多角的に考察し公正に判断する力を養うことを授業のねらいとした。本検証授業では、これらの学習を基に、課題解決の場面で、現実社会から求められている企業の役割について構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論する力を養うことができたかを検証した。授業の始めにルーブリックで評価規準を生徒に示し、単元のまとめとして、個人ワーク、グループワーク、振り返りの活動に議論する場面を設けた。生徒が授業のねらいを理解した上で、現実社会から求められている企業の役割について考察・構想する学習活動を行うことができ、今までの既習事項を活用し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして、論拠を基に議論することができたかについてルーブリックで検証した。ルーブリックで 53.8% の生徒が A (十分満足できる) と評価できるので、仮説②は一定の効果があつたと考えられる。

エ 成果と課題

(ア) 成果

ルーブリックの評価結果から、単元の始めに基軸となる問いを設定し、身に付けさせたい力を教員と生徒が共有できたことにより、課題解決の学習過程では、企業に関する既習事項や資料を活用して、個人が考察し、企業が取り組むべき役割について活発に議論が行われた。

(イ) 課題

単元を通して、生徒がどのように変容したのかを見取る振り返りシート (単元終了時、学期末・年度末) の作成の工夫が必要だと考えられる。

5 実践事例Ⅳ 現代社会

教科名	公民科	科目名	現代社会	学年	第3学年
-----	-----	-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 「国際政治の動向」
 イ 使用教材 『最新現代社会』（実教出版）

(2) 単元（題材）の目標

- ・ グローバル化が進展する国際社会において、国際政治の歴史的展開と現在の動向を理解している。
- ・ 国際協調をしていく上で国際的な組織の役割について認識し、国際社会における人種・民族問題や核兵器と軍縮問題への国際的な協力について理解している。
- ・ 国際社会における日本の果たすべき役割について考えることができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①国際政治の歴史的展開と現状について理解し、国際協力の在り方についての判断の手掛かりとなる概念や理論を理解している。 ②冷戦終結後の国際社会が現在抱える問題点について資料を読み取り、まとめる技能を身に付けている。	①国際政治について、国際的な機構・組織や枠組みの果たす役割について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を身に付けている。 ②国際社会において日本が果たすべき役割について、合意形成や社会参画を視野に入れながら、学習した概念や理論を関連付けて構想し、論拠を基に議論することができる。	①国際政治の動向に対する関心を高め、主体的に調べ理解しようとして基軸となる問いを意欲的に追究しようとしている。 ②よりよい国際社会の実現に向けて現在の諸課題を見いだし、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に説明・議論することを通して社会に参画しようとする態度を身に付けている。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（6時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
【基軸となる問い】国際社会における日本の果たすべき役割とは何か。					
第1時 (課題把握)	【ねらい】国際社会の特質に関心をもち、国際法について理解する。				
	【小さな問い】国際法の意義と役割とは何か。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国際法の意義を理解し、どのようにルールが定められたかを理解する。 ・ 条約について理解を深め、国際社会の平和と安定、人権尊重のために多国間で協力する意義について考察する。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> ・ ウェストファリア条約に始まる国際社会における国際法整備の歴史的展開を理解している（ワークシートの記入・提出）。 ・ 国際社会で現在、結ばれている条約について理解し、国際法が国際社会の平和と安定、人権尊重のために必要不可欠であると理解している（机間指導による観察・質問などに対する発言）。

第2時 (課題把握)	【ねらい】国際連合の目的を理解する。			
	【小さな問い】国際社会における平和と協調のための仕組みとは何か。			
	・国際連合の組織と活動を具体的に理解する。		●	・国際連合を中心とした国際社会の動向を理解しようとしている(机間指導による観察・質問などに対する発言)。
	・国際社会の平和と安全に取り組む安全保障理事会について理解する。	●		・安全保障理事会の意義と役割について理解している(ワークシートの記入・提出)。
第3時 (課題把握)	【ねらい】第二次世界大戦後から現在までの国際政治の歴史的展開について考察する。			
	【小さな問い】国際政治は戦後どのように進展してきたか。			
	・第二次世界大戦後の国際政治が米ソの冷戦構造の上にあったことを理解する。		●	・米ソの冷戦構造について、理解しようとしている(机間指導による観察・質問などに対する発言)。
	・冷戦終結後の世界について、どのような問題が出てきているかを考える。	●		・冷戦終結後の国際社会の問題について、多面的・多角的に考察している(ワークシートの記入・提出)。
第4時 (課題追究)	【ねらい】軍縮と国際平和について、歴史的展開を理解した上で日本のとるべき役割について考察する。			
	【小さな問い】国際社会の平和のために日本ができることは何か。			
	・核軍拡競争から軍備管理・軍縮への道のりを理解する。	●		・軍縮や核廃絶に向けた世界的取組の現状を理解している(机間指導による観察・質問などに対する発言)。
	・国際平和を実現するために日本が果たすべき役割について考察する。		●	・日本が果たすべき役割について、個人ワーク・グループワークを通じて多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を身に付けている(ワークシートの記入・提出、ルーブリックAの活用)。
第5時 (課題追究)	【ねらい】人種・民族問題の冷戦終結後の現状を把握し、その解決に向けた国際的な協力について理解する。			
	【小さな問い】人種・民族問題の解決にはどのような取組が必要か。			
	・民族紛争に伴う難民や国内避難民に対し、国際連合やNGOが連携していることを理解する。	●		・国際連合やNGOの活動について理解している(机間指導による観察・質問などに対する発言)。
	・難民問題の日本の関わりについて考察する。		●	・難民問題に対する日本の対応について、国際社会の現状を正しく理解した上で、その在り方を考察することができる(ワークシートの記入・提出)。
第6時 (課題解決) 本時	【ねらい】難民問題についてのディベートを通じ、対話を通じて多面的・多角的な考え方があることを認識し、自らの理解を深める。			
	【小さな問い】難民問題に日本はどのように取り組むべきか。			
	・「日本は難民をもっと受け入れるべきか」についての討論をグループ別に分かれて行い、賛成派・反対派それぞれの立場の違いに気付く。		●	・ディベートによる主体的・対話的な学習を通じて、議論の中で自らの主張を展開している(机間指導による観察・ワークシートの記入・提出、ルーブリックBの活用)。
	・ディベートを終えて、難民問題について捉え直し、グループの見解をまとめる。		●	・難民問題について、日本が果たすべき役割について、論拠を基に議論している(ワークシートの記入・提出、ルーブリックBの活用)。

(5) 本時（全6時間中の6時間目）

ア 本時の目標

難民問題に日本がどう取り組むべきか、ディベートやグループ討論を通じて考察することができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(7) 授業で得られた知識を活用し、個人ワークやペアワークでまとめた見解をもち寄ってグループワークを行い、論拠を基にした議論をすることができる。

(4) ディベートで自らと異なる意見を理解した上で最後に学習の振り返りを再度、グループで行うことで、合意形成を目指して議論する力を高めることができる。

なお、ディベートでは、賛成、反対の優劣を判定せず、グループ協議の中で主張の妥当性について、互いに確認することに留め、論拠に基づき賛成、反対の判断をして合意形成を図ることにした。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	<p>【小さな問い】難民問題に日本はむどのように取り組むべきか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルブリックで、授業の到達目標を示し、学習の動機付けを図る。 ・前時までの学習事項を確認する。 ・これまで難民問題について学んできた内容について再度振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を使用し、本時のディベートのテーマ『日本はもっと難民を受け入れるべきか』を提示し、本時の授業の目標を示す。 ・ペアワークやグループ学習に当たり、守るべきグランドルールを確認する。 ・ディベートに向けた知識のつながりを確認する。 	
展開① 26分	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに基づき、先ず個人ワークとして賛成、反対の理由を考える。 ・次に賛成派のペアと反対派をつくり、ペアワークを行う。 ・ペアで根拠について意見をまとめたのち、ディベートの準備をする。 <p>・ディベートでは、賛成派二人・反対派二人の四人でグループをつくり、賛成派と、反対派がそれぞれ3分間で発表したのち、主張の論拠に関する、質問や反駁をそれぞれ2分間で行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・賛成又は反対のグループ分けは、その場で教員が指示する。 ・机間指導を行い、生徒の学習状況を確認する。 ・発表者と質問者に役割分担し、発表に向けて資料をまとめさせる。 <p>・発表中もメモを取らせ、相手の主張の論拠を確認させる。</p> <p>・質問や反駁を通じてそれぞれの主張を深めさせる。</p> <p>・机間指導を行い、ディベートの進行が滞っているグループには適切に助言をし、ディベートの進行管理に努める。</p>	<p>イー②難民問題について、日本が果たすべき役割について賛成派・反対派それぞれが根拠を基に議論している（ワークシートの記入、提出、ルブリックBの活用）。</p>
展開② 14分	<p>・ディベート後にグループで振り返りの協議を行い、賛成と反対でどちらが妥当な主張であったのか、その論拠を確認し、合意形成を図り、「難民問題に日本はどう取り組むべきか。」についてまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを行い、共有のためにホワイトボードにまとめる他、ワークシートにも記入させる。 ・「日本が難民を受け入れるべきではない」との結論に達した場合、前時までの学習を基に他に協力できる代案を提示できるよう指導する。 	<p>イー②難民問題について、日本が果たすべき役割について論拠を基に議論している（ワークシートの記入、提出、ルブリックBの活用）。</p>
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・個人で今日の学習の振り返りを行い、再度難民問題について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の振り返りを行い、ワークシートに記入させる。 	

(6) 問いの設定理由

現在の世界ではグローバル化が進展し、一国単位の政治は、他国との関係によって非常に大きな影響を受けるようになってきている。本単元では現在の国際政治の動向を理解させた上で国際社会にいかなる問題があるのかを知り、その解決策や日本の果たすべき役割について、多面的・多角的に考察し公正に判断すること、論拠を基に議論することができる問いを設定した。

(7) 本時の振り返り

ア ルーブリックによる評価結果

表4 【「ルーブリックB」論拠を基に議論する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	A (十分満足できる) 77.4% (24/31人)	B (おおむね満足できる) 22.6% (7/31人)	C (努力を要する) 0% (0/31人)
難民問題について、ディベートを通じて妥当性や効果、実現可能性などを指標にした論拠に基づく議論をし、多様な意見を取り入れたうえで合意形成を目指してグループでの見解をまとめている。	自分と異なる意見に十分配慮しつつ、論拠に基づいて議論した結果深まったグループでの見解をまとめることができる。	自分と異なる意見についても理解した上で、グループ内で自らの主張を示すことができる。	自分と異なる意見に配慮せず、自説を展開している。

イ アンケート結果

検証授業に参加した31人にアンケートを実施した。「国際協力をしていくために日本が果たすべき役割について考えることができた」と肯定的な意見を述べた生徒が約80%を占め、具体的な方策についても提言することができるようになった。

ウ 仮説の検証

単元の課題把握の場面では、国際政治についての基軸となる問いを設定することで、生徒が単元を通じた学習活動の見通しをもつことができ、課題追究の場面では、多面的・多角的に考察し公正に判断する力を養うことを授業のねらいとした。本検証授業では、これらの学習を基に、課題解決の場面で現実社会から求められている日本の国際協力の在り方について構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標として、論拠を基に議論する力を養うことができたかルーブリックで検証した。ルーブリックで77.4%の生徒がA(十分満足できる)と評価できるので、仮説②は一定の効果があつたと考えられる。

エ 成果と課題

(ア) 成果

ディベートを授業に取り入れることにより、生徒の授業への意欲の高まり、互いの意見の尊重、妥当性や効果、実現可能性を指標にし合意形成を目指して議論をする力の高まりを実感することができた。また、ワークシートに生徒の思考が深まっていく過程を記入させることで、論拠を基に議論する力が付いたか客観的に判断することができた。

(イ) 課題

課題解決のためのディベート実施の学習過程の後に、振り返りための事後指導の学習過程を単元指導計画に組み込むことで、新たに課題を見だし、その課題について追究・解決する活動につなげていくことができると考える。

VI 研究の成果

昨年度の研究では、単元全体や授業の場面に応じた主体的・対話的で深い学びを観点とした学習活動の在り方が今後の課題として提示された。そこで、本部会では、学習過程を大きなテーマとし、単元指導計画において課題把握・課題追究・課題解決という一連の学習過程を重視し、それぞれの学習過程に適切な学習活動を設定することで、思考力・判断力・表現力等を高める授業実践を研究した。各実践事例の生徒アンケート結果から「他者と話し合うことで自分の考えが深まった。」、「様々な資料を使うことで、選択肢が増えて頭を使った。」、「自分が想定していた以上に多様な考え方があることが分かった。」などの感想が挙げられ、学習に対して意欲が高まっている傾向がみられた。以下に、学習過程ごとの実践事例及びルーブリックを用いた仮説検証による研究の成果を報告する。

1 課題把握

各実践事例において、今年度の研究主題に沿い、単元の課題把握の場面で、基軸となる問いを設定した。基軸となる問いを設定することにより、生徒が全体の学習活動を俯瞰することができ、現実社会の諸課題について、課題把握・課題追究・課題解決という一連の学習プロセスに取り組むことができ、一定の成果を上げることができたと判断できる。

2 課題追究【ルーブリックAの評価】

現実社会の諸課題について、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を評価するルーブリックA（表1・2）を使用し、実践事例Ⅰ・Ⅱにおいて仮説①の検証を行った。

実践事例Ⅰでは、他者と協働し各金融商品のリスクを整理した上で、運用商品を選択することを「多面的・多角的考察」、シミュレーションによる分析結果を踏まえ、客観的に判断することを「公正に判断する力」と定義した。成果として、全ての生徒がペアワークにおいて、他者と協働する姿を確認できた。さらに、既習事項やICT機器を活用し多面的・多角的に考察をしている生徒も確認することができた。ルーブリックAにおいて、多面的・多角的に考察ができている場合をB（おおむね満足できる）と評価し、B以上の評価を得た生徒は86.4%であった。さらに、多面的・多角的考察し、シミュレーションによる分析結果を踏まえ客観的に判断できた生徒はA（十分満足できる）と評価し、該当生徒は59.4%であった。

実践事例Ⅱでは、ワーク・ライフ・バランスについて、他者の意見を踏まえ、諸資料を読み取ることを「多面的・多角的考察」、それらのプロセスを踏まえ、自己本位にならず客観的に判断する力を「公正に判断する力」と定義した。グループワークへの参加や諸資料の活用を通し、多面的・多角的に考察している生徒の様子が見受けられた。多面的・多角的に考察ができている場合をB（おおむね満足できる）と評価し、B以上の評価を得た生徒は64.3%であった。さらに、多面的・多角的考察を踏まえ、ワーク・ライフ・バランスについて、自己本位の視点からではなく、他者と共にどのように向き合っていくかについて客観的に判断できた生徒はA（十分満足できる）と評価し、該当生徒は35.7%であった。

以上、実践事例Ⅰ・Ⅱにおけるワークシートの記述やルーブリックAの評価結果より、仮説①の検証について、一定の成果を上げることができたと判断できる。

3 課題解決【ルーブリックBの評価】

現実社会の諸課題について、論拠を基に議論する力を評価するルーブリックB(表3・4)を使用し、実践事例Ⅲ・Ⅳにおいて仮説②の検証を行い、単元のまとめとした。

実践事例Ⅲでは、企業の役割について、利潤追求の視点と株主、ステークホルダー、社会的責任などの視点を活用してグループでの討議を行い、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして議論する活動を行った。ルーブリックを事前に提示することで、授業の到達目標を明確にし、主体的に議論に取り組ませることができた。議論に際し、他者の主張を踏まえたり取り入れたりして、企業の役割についての自分の考えを再構成しながら、論拠を基に議論することができている場合をB(おおむね満足できる)と評価し、B以上の評価を得た生徒は89.2%であった。さらに、企業の利潤追求の視点と株主、ステークホルダー、社会的責任などの概念と関連付けて構想し、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして根拠を基に議論できた生徒はA(十分満足できる)と評価し、該当生徒は53.8%であった。また、単元のまとめとして検証授業では現代の企業が果たす役割を授業の中核としたが、単元の学習後のアンケートでは「グループで議論することにより、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりすることで、その企業活動にとって最善は何かを考えることができた」など肯定的な意見が80%を占めた。論拠を基に議論を深めることができたことと推察できる。

実践事例Ⅳでは、難民問題について、ディベート活動を通じて妥当性や効果、実現可能性などを指標にした根拠に基づく議論をし、その上で難民問題への日本の取組について合意形成を目指してグループでの見解をまとめる活動を行った。ルーブリックの評価に当たり、これまでの研究員の協議を踏まえて生徒の思考のプロセスが分かるワークシートを作成した。個人ワーク、ペアワーク、ディベート、グループ協議のそれぞれにおいてどのように自分の考えが変容したかをワークシートから読み取れるように改めた。その上でルーブリックに基づき評価した。議論を行う過程で自分と異なる意見も理解した上で、自らの主張を示している場合をB(おおむね満足できる)と評価し、B以上の評価を得た生徒は100%であった。さらに、論拠に基づきグループでの見解をまとめることができている場合をA(十分満足できる)と評価し、該当生徒は77.4%であった。また、単元のまとめとして国際政治問題を一つ取り上げ、考察を深める形としたが、単元の学習後に生徒に基軸となる問いに関するアンケートを実施したところ、「国際社会における日本の果たすべき役割を考えることができた。」など肯定的な内容が約80%を占めた。単元のまとめとしての課題解決の学習が効果的であったことが分かる。

以上、実践事例Ⅲ・Ⅳにおけるワークシートの記述やルーブリックBの評価結果より、仮説②の検証について、一定の成果を上げることができたと判断できる。

4 ルーブリック使用の効果

ルーブリックA・Bを提示することによって、事前に本時の達成すべき目標が明確となる上、生徒たちは見通しをもった取組ができるようになり、生徒の学習意欲向上に資することができた。また、グループワークでは、ルーブリックが事前に示されていることでグループ全体での連帯感が増し、グループ全体で良い評価となるために協力して活動を行い、議論がより深まる様子が見られた。ルーブリックを活用することで仮説の検証のみならず、生徒の授業への関心を深めることができたといえる。

Ⅶ 今後の課題

本研究では、学習過程の課題と評価の課題を指摘し、授業改善に向けた課題をまとめる。

1 学習過程の課題

(1) 課題把握

課題把握において、基軸となる問いの設定が大きな焦点となる。単元の導入に当たって、基軸となる問いの設定及び、それに関連する小さな問い、課題把握のために活用する資料等が生徒の実態に合っていない場合、主体的・対話的で深い学びにならず、指示された課題・作業を行う授業となってしまう可能性がある。前単元や既習事項を活用した問いの設定を、生徒の実態に即して検討する必要がある。

(2) 課題追究

知識・技能を活用するワークシートを用いて、個人ワークを行った後に生徒の自分の意見と他者の意見とを比較するグループワークを行った。実践事例Ⅰ及びⅡのループリックから、80.3%の生徒がグループワークにより多面的・多角的に考察し、公正に判断する力が育まれたと判断したが、一定数の生徒はグループワークに主体的に参加できていない様子も見受けられた。年間授業計画を通して、グループワーク等を取り入れ習熟させる必要がある。

(3) 課題解決

課題解決の学習過程では、単元の振り返りを行い、考察したことや構想したことを活用して論拠を基に議論する力を育むことができた判断できる。しかし、単元の振り返りとなる考察・構想する個人ワークを行ってから、議論するグループワークを行った場合、時間に追われた生徒も見受けられたので、個人ワークを基に課題解決に向けた議論をする時間と議論のまとめをする時間と二時間に分けて生徒の変容を見取る指導計画を検討する必要がある。

2 評価の課題

本研究ではループリックを用いて生徒の変容を確認したが、ループリックをICTで提示したり、ワークシートに掲載して提示したりするなど、各検証授業では必ずループリックを使用した。平易な言葉に置き換えて提示をすると生徒に良好な変容が認められたことから、生徒の主体性を更に引き出すための効果的なループリックの使い方・提示の仕方について、研究する必要があると考えられる。

3 授業改善に向けた課題のまとめ

課題把握・課題追究の学習過程では、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育めるのかについて、また、課題解決の学習過程では、論拠を基に議論する力を育めるのかについて、それぞれを見取るループリックから検証した結果、二つの仮説の有効性は実証できた。しかし、検証授業の実践から、課題把握・課題追究・課題解決の各学習過程において、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力・論拠を基に議論する力を別々に定義し見取ることが難しい単元もあった。それ故、今回研究した二つの力は、どの学習過程の場面でも見取ることができる場合もあるのではないかと考えられる。そのため、単元を通じて個人ワーク、グループワークを取り入れた授業改善及び単元を通じて活用する振り返りシート等を工夫し、いずれの学習過程においても「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、公正に判断する力・論拠を基に議論する力を育むための単元指導計画を作成する必要がある。

平成 29 年度 教育研究員名簿

高等学校・公民

学校名	職名	氏名
東京都立町田高等学校	教諭	戸田 幸志
東京都立野津田高等学校	主任教諭	◎ 浅野 義人
東京都立小平西高等学校	教諭	竹達 健顕
東京都立東村山高等学校	主任教諭	長谷川 聡

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 佐々木 純

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

高等学校・公民

東京都教育委員会印刷物登録

平成 29 年度第 142 号

平成 30 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社